養護教諭部会

Ⅰ．研究の概要

１．研究主題

健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして

２．主題設定の理由

近年の少子高齢化や都市化、急激に進展している情報のグローバル化など、社会環境や生活様式の急激な変化は、児童生徒の心身の健康に大きな影響を与え、生活習慣や環境に起因する疾患やアレルギー性疾患、新たな感染症の増加、さらには心の病など、健康課題を多様化させている。同時に、人間関係の希薄化、幼少期に経験することが望まれる様々な生活体験・社会体験・自然体験の機会の減少は、他者への関心や愛着、信頼感を育てる大切な機会を減少させ人との関わりをつくることやコミュニケーションをとることがうまくできない子どもたちの増加につながっているように思われる。また、いじめ・不登校・貧困・虐待など様々な問題は、子どもたちが安心して生活できることが難しい状況を生み出しており、児童生徒の健康問題との関連が深い。対人関係によるストレスや不安などから、からだに不調をきたす事例もあり子どもたちの健康課題の背景に自己肯定感や自尊感情の低さが存在することが少なくない。このように複雑で変化の激しい社会において、私たちは、子どもたちの自己有用感・自己肯定感（自尊感情）を高め、自分自身も他者も大切にできる子どもを育てたいと考える。それをもとに健康に関する知識・技能をもち、自ら意思決定し・行動選択できる力、さらには他者とかかわる力を持つ子どもを育てたい。

そのためには、養護教諭として、子どもたち一人一人を大切に受容し、職務の特性を生かした実践をとおして具体的な対応や支援の在り方を探求することが重要と考える。具体的には、常に「養護」とは何かを問い続け、子どもの健康と人権を守り育てる養護実践を深めながら、確かな連携方法を模索し、家庭や地域社会、教職員に対する効果的な情報発信の方法を検討するとともに、健康課題について、家庭と学校が課題を共有しながら学校全体・地域社会全体で対応していく必要がある。以上のように、複雑かつ多様化した子どもたちの健康課題に対し養護教諭の視点を大切にした取組が必要と考え、標記の研究主題を設定した。

研究の経過

平成 16 年度から平成 25 年度までの 10 年間、「健康について考え、自分らしく生きていくことができる子どもの育成をめざして」という研究主題のもと、子どもたちの個々の健康・発達課題に寄り添い、対応や支援の在り方を研究し実践してきた。子どもたちの健康課題は、ますます複雑で多様化している。その点を踏まえ、今後も養護教諭の特性を生かした養護実践を継承しつつ、さらに深め発信していくことが重要であるとおさえた。その課題解決に向けて、26 年度から新たな研究主題を設定している。

新しい研究主題のもと、各ブロックは具体化した主題を設定し研究を推進してきた。各ブロックの連携を深めることにも重点を置き、今日的な課題を共有し、より研究を深めてきた。また、第二次研究協議会の分科会では、研究計画に基づく、積極的な討議がなされ、実技・理論研修会では、会員一人一人の課題解明と日常の養護実践に結びつく成果をあげている。

令和元年度は、２年継続研究のまとめの年になるので、各ブロックの研究成果を他ブロック・全会員で共有することをめざし、拡がりをもった視点で研究を展開させていきたい。

３．研究内容

＜研究内容１＞

子どもたちの実態を把握し、問題点を明確にする。

＜研究内容２＞

子どもたちが自己肯定感をもち、自分らしい選択をし、人とのつながりを大切にしながら生きていけるような支援の在り方を検討する。

＜研究内容３＞

保健室で気がついた子どもたちの実態について、教職員・家庭・社会にどのように発信し連携していくのか、その方法を検討する。

４．研究方法

（1）会員一人一人の日常実践に基づいた市町村ブロックの共同研究を推進する。
（2）実技研修会や理論研修会を開催し、日常実践や今日的な課題解明につなげていく。
（3）各ブロック間の連携を深め、より一層、研究が深まる取組をする。

Ⅱ．研究の経過と成果

- ブロック情報・部会情報の発行
- 推進委員研修会ごとのブロック交流
- 部会ＨＰの更新

１.全体の実践の経過

（１）役員研修会・推進委員研修会の内容

４月１６日　今年度の業務・研究計画の確認
５月１７日　研究協議会・理論研・実技研・予算・実践資料集について
７月　２日　研究協議会・理論研・実技研について
８月１９日　実技研について
９月１７日　研究協議会・次年度研究・石狩の教育・ブロック研究レポートについて
１０月１７日　研究協議会について
１１月２２日　研究協議会反省・理論研反省・ブロック反省・分科会資料集・実践資料集について
２月１８日　研究協議会反省・研究活動の反省・次年度研究計画について

（２）実技研修会

８月２７日（火）　石狩教育研修センター
「学校が避難場所になったら」～備えと被災時の対応を考える～
講師：北広島市役所　総務部　危機管理課　防災専門官　西澤　弘充　氏

（３）第二次研究協議会

１０月１８日（金）　北広島市立西の里中学校
・レポート発表
・分科会　（保健室小・保健室中・救急処置・相談活動・掲示物・保健指導）
・掲示物交流
・理論研修会　「子どもの問題をみる３つの見方」
講師：北海道大学大学院　教育学研究院　教育学部准教授　加藤　弘通　氏

２.各ブロックの研究と成果

＜　当別・新篠津ブロック　＞

１．研究主題

健康について考え、こころ豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして
～子どもによりそった養護教諭の職務の在り方～

２．研究の経過と成果

養護教諭の職務を見直す中で、「アレルギー対応」について焦点をあてた。

① 「アレルギー学習ノートを用いた保健指導」：宿泊行事の際には、児童生徒自身が自らのアレルギーについて考え、適切な判断ができるようになるために必要な指導であると共通理解を図った。子どもの不安に直接応えることができ、児童生徒本人と養護教諭双方の安心感に繋がることを感じた。

② 「緊急時アレルギー症状チェックシート」：緊急時の際に記録漏れなくチェックすることができる。速やかに使えるよう緊急時対応フローチャートと合わせて備える必要性を確認することができた。

③ 「進学時におけるアレルギーに関する引き継ぎ」：引き継ぎの資料は内容を精査し必要な情報をまとめることで伝え漏れを防ぎ、円滑かつ正確な引き継ぎになることが考えられた。

３．研究のまとめと今後の方向

２年間にわたり、「アレルギー対応」に関する養護教諭の職務について研究を行い、各校の課題やアレルギー対応の実際を知ることができた。今後も日常の不安や悩みを交流・検討し合い、養護教諭としての役割の重要性を感じながら研究で得た多くの成果を職務に反映していきたい。

＜　北広島ブロック　＞

１．研究主題

色のバリアフリーへのとりくみ
～誰もがわかりやすい環境を～

２．研究の経過と成果

この主題における２年間の研究で、教職員、児童生徒、保護者に共通の資料を作成し配付してきた。３年目の今年度は、各校で実態に合わせた取組を実践し、全体で交流しながら研究を進めてきた。

今年度の成果としては、２年分の資料がデータとして残っているので、各校で実態に合わせた資料を作成する際に活用することができたし、今年赴任した先生もすぐに実践に取り組むことができた。さらに、参考にする資料が同じでも、視点や場面によっていろいろな活用ができることが交流することによってわかった。実践の時期においても、年度始めの４月に校内研修を行った学校は、全教職員に周知することができてよかった。また、５～６月に資料配付を行った学校は、しっかり読んでもらうことができ、よい反応を得ることができた。

３年間の研究を通し、継続的に資料を提示することで、教材・教具の色使いを意識したり、配慮したりしてくれる教職員が増えたことは大きな成果と考える。

３．研究のまとめと今後の方向

３年間の積み重ねで、特性のある子に配慮するだけではなく、「誰もがわかりやすい」という研究テーマを広めることができた。これからも機会をとらえて、教職員や児童生徒、保護者に発信していきたい。

＜　千歳ブロック　＞

１．研究主題

自分の健康に関心を持ち、よりよい生活習慣について考え行動できる子どもの育成をめざして
～健康診断をとおして～

２．研究の経過と成果

研究１年次目は子どもたちが健康診断を自分のこととして積極的に受け、その後のよりよい生活を考え行動できるようにするためにどうすればよいかを考えていくため、研究主題を意識し、Ａ「身体測定、視力検査、聴力検査」、Ｂ「内科検診（結核・四肢の状態）、眼科検診、尿検査」、Ｃ「歯科検診、耳鼻科検診、心臓検診」の３グループに分かれ、学習や健康診断の方法の見直しを行った。学習会を行い健康診断の目的・方法などを改めて確認したことで、健康診断の基本に立ち返ることができた。健康診断の基本を押さえながら、負担が少なく効果的に行える工夫を話し合い検討した。

研究２年次目の令和元年度は３つのグループ分けを継続し、各学校の実情に応じて健康診断の中で健康診断の会場や方法の工夫、保健だよりや事前指導の工夫などの実践を行った。実践の結果を交流したことで成果や課題を確認することができ、有意義な研究であった。

３．研究のまとめと今後の方向

今回の研究での取組で、よりよい生活習慣について子どもたちが考えるきっかけを作ることができたと考える。しかし、子どもたち自ら行動化をするという所までは至っていない。今後は子どもたちがどのように生活習慣と結び付けて行動化できるかが課題となった。今年度だけの取組ではなく、子どもたち自ら生活習慣について考え、行動できるよう継続して子どもたちに伝えていくことが必要である。

＜　江別ブロック　＞

１．　研究主題

自分のからだに関心を持ち、自ら考え行動できる子どもの育成をめざして」
～保健だより・保健指導を通して～

２．研究の経過と成果

昨年に引き続き、「香り」「色覚」「ハチ・虫刺され」の３グループに分かれ、各グループで作成した保健だより等を江別ブロックの各学校で順次発行して、検証を行った。

①　「色覚」グループ

教職員向けに保健だよりを発行したことで正しい認識を共有でき、色分け以外の表示の仕方など、カラーユニバーサルデザインを意識し、全ての人に正確な情報が伝わるよう配慮できることが確認できた。

②「ハチ・虫刺され」グループ

保健だより発行後に、保護者や子どもたちから行動化につながった感想も得られ主題に近づけたと考える。教師から子どもへ、子どもから保護者へつながるような保健だよりを今後も心がけていきたい。

※「香り」グループは、後日保健指導を提示、保健だよりを発行する。成果と課題は今後まとめていく。

３．研究のまとめと今後の方向性

今年度は、前年度から作成に取り組んできた保健だよりや保健指導資料、ポスター等を各校で提示し、意識や行動の変容について検証してきた。意見を出しやすい小グループで話し合いをもってから全体で交流・意見交換を行い、更に小グループで検討を加えていくことで、他グループの研究内容やデータを共有でき、養護教諭間での新たな学びの機会となった。今後も取組の成果と課題を検証するとともに、さらに子どもたちの心に届く実践ができるよう目指したい。

＜　石狩ブロック　＞

１，研究主題

「自らの命を守るために主体的に行動する子どもの育成をめざして」

２，研究内容

昨年度より主に救急処置や対応に関する事例交流を行ってきた。事例交流から出てきた問題点や課題を整理し、少しでも子どもが「主体的に行動する」ようになっていくためには何をしなければならないかを探っている。そこから出てきた課題を解決するために、今年度は、「日常」「校外行事」「危機管理」と場面ごと３つのグループに分かれ、まず取組を進めるにあたり大切にしたいことをみんなで押さえたうえで実践に向けて話し合っている。

３，研究の成果と課題

３つのグループの話し合いから、次の３つの共通する視点が見えてきた。

＊子ども一人一人に寄り添った対応

＊個を大切にした柔軟な対応

＊養護教諭だけで抱え込まず、学校全体で子どもを見ていく

この視点からぶれることなく、それぞれの取組を行っていくことを確認した。

今後は、具体的に子どもや教職員に対してできる働きかけを模索し、実践していく。子どもが自らの命を守るために何が必要かを探っていきたい。

＜　恵庭ブロック　＞

１．研究主題

自分のからだと向き合い、自ら選択し表現できる子どもの育成をめざして
～養護教諭のスタンスに立った子どもの支援と役割～

２．研究内容

子どもの健康問題を見つめた支援の在り方を研究し始めて２年次となった。健康問題から見る相談活動と、健康情報から見る健康カードの内容整理の二つの研究を進めている。

相談活動について、１年次は各学校の事例を交流してまとめたが、今年度は一つの事例をより深く見つめて検討や意見交流を行った。また、先輩養護教諭が経験された事例から、支援の在り方や問題の捉え方を学び研究を深めた。事例としては、家庭での問題から起きる学校での不適応や虐待、場面緘黙について挙がり、いくつかの視点に沿って話し合いを進め、問題の背景や支援の在り方、校内･校外の連携などについて検討した。また、職員間での情報共有や養護教諭自身の記録化の必要性も確認された。

健康カードの内容整理については、健康情報を扱う大切な記録であることや日常の扱いやすさを考慮した校正を進め、来年度からの使用を目標に取り組んだ。

３．研究の成果と課題

事例交流では、養護教諭として自分たちの経験を振り返るよいきっかけとなった。それぞれの立場における様々な考え方（捉え方）や状況に応じた対応の仕方（方法）、校内の連携体制や外部機関へのつなげ方等を学ぶ有意義な時間となった。また、子どもの状態や感情、気持ちを受け止めながら話を聞くということの重要性を再認識した。

今後も、養護教諭のスタンスから、子どもや保護者への支援、学校内の支援体制の在り方などを模索していきたいと考えている。

Ⅲ．実技・理論研修会

１．実技研修会

８月２７日(火)　１４：３０～
於）石狩教育研修センター

テーマ　「学校が避難場所になったら」　～備えと被災時の対応を考える～
講　師　　北広島市役所　総務部　危機管理課　防災専門官　西澤　弘充　氏

平成３０年に発生した大阪北部地震や豪雨災害、そして胆振東部地震など近年の悲惨な災害状況が報告された。あわせて避難場所での必要品や開設までの流れなどの具体的な話があり、段ボールベットや携帯トイレ、簡易テントなども紹介された。

学校が避難場所として運営される場合であっても、学校は授業の早期再開を目指す必要がある。そのためには避難所と並行して授業再開の可能性を考えていかなくてはならない。学校が一丸となり関係機関とも協同連携しチームとして対応していくことが重要である。

後半には、避難所運営ゲームHUG北海道版「DOはぐ」を体験した。 短い時間ではあったが学校が避難所になった時、養護教諭としてどのように動けば良いかシミレーションができ大変勉強になった。危機管理のためにこれから何を準備しなくてはならないか実感した研修となった。

２．　理論研修会

１０月１８日(金)　１３：３０～
於）北広島市立西の里中学校

テーマ　「子どもの問題を見る３つの見方」
講　師　北海道大学大学院　教育学研究院　教育学部准教授　加藤　弘通　氏

○見方を変えるための３つの見方
・基本の見方と話の聞き方
Ⅰ「できないこと」ではなく「できること」を見る。さらには「できていることとしてみる」
→良いことを語ってもらう、良いところでの関わりを厚くすることが大切。
・リソースという考え方が重要。
例）学力が遅れている　→　学力は○年生まである

Ⅱ「なぜ」よりも「なに？」を考える
→具体的に語ってもらう
⇩
「できないこと」が「できるようになった」時、そこで「なにが起きたのか」を確認する。

Ⅲ問題（できないこと）を「分けてみる」
→差異を入れて語ってもらう

「子どもの問題を見る３つの見方」は、見方を変えるための３つの見方・語り方、聞き方の重要性・真実より機能という視点に着目するとまとめられた。専門職が専門家として機能するためには、子どもの良いところで関わってもらうことが大切である。

３．研修会の成果

（１）実技研修会

東日本大震災以降、学校が避難場所になった時の養護教諭の役割は児童生徒の保健衛生指導、体調管理、心のケアと多岐にわたっている。養護教諭は何を備え、どのように災害に対応するべきか、被災体験の実践から多くを学ぶことができた。昨年の胆振東部地震から１年を過ぎ、改めて災害への意識を高め、考えさせられる有意義な研修となった。

（２）理論研修会

子どもの見方、声のかけ方、聞き方などについて、多くの事例を交えた具体的な話を聞くことができた。できないことに着目しがちだが、できることに着目をする。「なぜ」ではなく「なに」を考える。「子どもを変えるのではなく、自分たちの対応を変えれば良い」支援を要する児童生徒が増加している中、養護教諭としてどのように対応すべきか、即実践につなげることができる非常に有意義な研修となった。

Ⅳ．第二次研究協議会

１．分科会討議

＜保健室（小）①②＞

・養護教諭は各校一人しかいない場合が多いため、各々のやり方が児童生徒のための良い対応であるかを、各校の保健室経営や実践交流を通して見つめ直すことができた。

・アレルギー対応について各校の実態交流を行うことで、チェックミスをなくすための手立てを知ることができた。また、命に係わる重要な問題であるという認識を全教職員が持ち、学校全体で徹底することが必要である。更にはアレルギーを個性と考え、一人一人違うことを認めあえるような支援の在り方を考えていく必要がある。
・児童生徒の実態が年々変化している中、養護教諭という立場でどのように関わっていくか、どのような保健室を目指していくべきか、養護教諭の専門性というところについて今後も考えていきたい。

＜保健室（中）①②＞

・どの学校も養護教諭が抱える悩みが似ており、各市町村の実態を情報共有することで、自分自身の対応を見直すことができたり、先輩養護教諭のアドバイスをもらうことで学びが深まった。特に、不登校生徒や保健室登校への対応については有意義な話し合いとなった。
・子どもたちが自己肯定感を持ち、自分の進路を自ら選択できるように支援していくためには、学校全体で対応にあたらなくてはならず、教職員はもちろん SC や SSW 等の関係機関を含めた連携や校内体制作りが必要であることを確認した。
・「養護教諭としてぶれない視点」を持ち続けること、しかし、一人で悩みを抱え込まず自分自身のメンタルヘルスを大切にして日々の実践に努める。個々で生徒をサポートするのではなくチームとしてサポートしていくことなどが今後の課題である。

＜救急処置①②＞

・各校の事例を交流したことで他校の様子を知ることができ、更には救急処置の方法や救急体制についても振り返ることができた。
・新しい知識や情報を得ることができ、疑問に思いながら行ってきたことの解決につながった。
・緊急時、スムーズに対応できるようにマニュアル作りや研修を行っていく必要性を感じた。また、様々なアレルギーを持つ児童生徒も増えているため、家庭との連携を密にし、職員間でも対応について共通理解を図ることが必要である。

＜相談活動＞

・各校の事例や悩みを交流することができた。校種や学校規模により問題も様々であるが、だからこそ小中連携の重要性を確認することができたのは大きな収穫となった。
・記録を残すことの大切さ、校内体制や情報共有の実態、関係機関との連携法等、学びを深めることができた。
・どの学校も課題となっていたのは、校内体制作りの確立である。昔と比べ子どもや保護者の質が変化している中で「誰もが安心して利用できる場所」という保健室の機能を損なわないような支援の在り方を模索していくことが求められる。

＜掲示物＞

・各校の工夫していることや困っていることを交流することができた。交流を通して、素敵なアイディアを聞くことができ苦手意識が少しなくなったという声もあがった。
・子どもたちに長く楽しんでもらうために、様々な仕組み等今後も研究していく必要がある。

＜保健指導＞

・集団、個別の保健指導について交流することができた。どちらも共通した課題として時間の確保があげられた。
・昨今、小中学校共に授業時数の確保が難しくなっているが、いかにタイムリーに適切な指導を行うかは、校内での計画と連携が重要であるとこが確認された。

２．掲示物交流

今年度も各ブロックによる掲示物の紹介を行い、工夫を凝らしたたくさんの作品を交流することができた。

Ⅴ．部会研究の成果と課題

１．成果

「健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして」の研究主題のもと、各ブロックが具体化した主題を設定し、研究を推進してきた。さらに、今年度はほとんどのブロックが研究の２年次、３年次目を終え実践を深め、成果と課題をまとめる年となった。各ブロックで行われた理論研修や実技研修には、他ブロックからの積極的な参加も得られ、今日的な課題を共有し、より研究を深めることもできた。また、第二次研究協議会の分科会は、研究計画に基づく討議の柱に沿った内容について活発に討議されるとともに、各校の事例や実践を交流することで課題解決に向けての方向性を探ることができた。

実技研修においては、学校が避難場所になった時の養護教諭の役割などについて学び改めて災害への意識を高め考えさせられ、理論研修では、子どもの見方を変えるための３つの見方を学び今後の実践に結びつく良い研修となった。

２．課題

次年度はほとんどのブロックで新たな研究に取り組むこととなるため、課題を明らかにし、研究の基礎を作り上げていくとともに、他ブロックの研究も積極的に学び、それぞれの研究に生かしていけるよう進めていきたい。また、理論研修会・実技研修会は、研修意欲が高まり課題解決に結びつく内容を検討していきたい。

（　文責　　三島　宏枝　）